

「新しい東北」作文コンテスト

小学生の部 入賞作文

小学生の部 優秀賞

06 「前を向いて」

宮城県 大江悠也「小学6年生」

08 「鳥じゅうかん理しを目ざすわたしにできるふっこう」

栃木県 山口万里「小学4年生」

10 「笑顔は魔法の調味料」

長崎県 黒川海空「小学1年生」

小学生の部 入選

12 「私が東北の人たちにできること」 東京都 辻真優「小学2年生」

12 「大好きな東北」 埼玉県 佐藤初花「小学3年生」

12 「私が今、復興のためにできる事」 愛知県 松本由梨「小学3年生」

13 「私を感じたふっこう」 福島県 村上紗和子「小学3年生」

13 「子供ガイドでもり上げ隊」 福島県 遠藤萌花「小学5年生」

14 「東日本大震災の教訓を忘れない」 愛知県 近藤康弘「小学5年生」

14 「あの災害をうけて…」 愛知県 野田比奈子「小学5年生」

14 「私たちにできる復興」 新潟県 加勢唄「小学6年生」

15 「私たちにできる復興」 新潟県 北澤奈緒「小学6年生」

16 「手と手をつないで」 神奈川県 佐々木香里「小学6年生」

16 「福島の復興へ今、僕にできる事」 ドイツ連邦共和国 鈴木晴稀「小学6年生」

17 「あたらしい東北」 パナマ共和国 西澤茉優「小学6年生」

17 「風の電話」 ヘルギー王国 前川優杏「小学6年生」

小学生の部 総評

小学一年生から六年生まで、

合計300作品を超える応募がありました。

低学年ならば東日本大震災当時はまだ2歳から4歳。

被災地に居住していたとしても

当時の記憶は鮮明でないものと考えられます。

しかしながら、

被災地の現状やこれからの思いやり、

自分たちにできることを

具体的に考えている児童が多いことに、

審査員一同、驚かされました。

岩手県、宮城県、福島県といった

被害が大きかった地域だけでなく、

遠く離れた地域に住んでいる児童も、

被災地の状況を調べ、

必要な支援のあり方をそれぞれに考えている点が、

とてもすばらしいという評価でした。

「前を向いて」

宮城県 大江悠也 「小学6年生」

三月十日まで、父も母もホタテの養殖作業に追われ、毎日忙しい日々を過ごしていました。女川町の指ヶ浜地区の海は、いつもおだやかで、ぼくの家の生活は、豊かな海に支えられていました。もちろん、カニや貝をとったり、魚釣りをしたり、ぼくたちにとっては、海は楽しい遊び場の一つでもありました。五月には、地域の若い人たちがみこしを担ぎ、みこしごと海に入るお祭りは、指ヶ浜地区の自慢でもありました。

しかし、あの日、あの時を境に、家族の生活が一変しました。指ヶ浜地区は、ほとんど何もなくなりがれきりばかりの集落になりました。ぼくの家も流され、入学式のために祖父に買ってもらった机や洋服、ランドセルも全部流されてしまいました。ぼくたち家族は、車の中で寝たり、親せきの家などにお世話になりました。そんな中で、四月になって入学式が行われることになり、ぼくは小学校に入学しました。母といっしょに普段着で参加しました。祖父に入学式の様子を見せてあげることができなかつたのは、ほんとうに残念でした。祖父は天国で、ぼくたち家族を見守ってくれているんだなと思いました。

ホタテ養殖をしている父と母は、すぐに前を向きました。幸い、親せきの方が、ぼくの家の船を沖に出してくれたおかげで勝栄丸が残りました。父も母も、すぐに指ヶ浜地区のがれきの片づけをし、養殖の資材を調達し、稚貝を北海道から購入し始めました。母は、（うちのお父さんは、海の仕事でしか生きていけない。私もお父さんといっしょにがんばるしかない。）と覚悟を決め、がんばったのだそうです。父と母の努力が実って、一年後には、ホタテを出荷できるようになりました。父は、津波ですべて持っていかれたものを取り返した思いだと喜んでいました。母は、ようやく第一歩を踏み出したと思ったそうです。その時の父や母の姿は、とてもかっこよく見えました。四十年以上もふるさと指ヶ浜地区で漁師をし続けた父だからできたことかもしれません。

変わったことは、震災後から住んでいる清水地区から車で三十分ほどかけて

指ヶ浜地区に通うため、父や母は以前よりも早く起きなければならなくなったことです。ぼくや姉には苦勞をかけないように弱音などいつさいはきません。だから、ぼくも休みの日にはホタテの耳つり作業を手伝います。

今、女川の町は急ピッチで新しい町に生まれ変わろうとしています。新しい駅もできました。新しい商店街もできてきました。何よりも、ふるさとである指ヶ浜地区の宅地の造成が進み、ぼくたち家族は、もうすぐ新しい家で生活することができます。父や母が家族のために一生けん命に働いていた姿を、ぼくは絶対に忘れません。これまで日本中の多くの人に支援していただいたことも忘れません。父母のように前を向いて進み、新しい思い出を作り直していきたいと思えます。

「鳥じゅうかん理しを目ざすわたしにできるふつこう」

栃木県 山口万里「小学4年生」

わたしは今、鳥じゅうかん理しを目ざしています。鳥じゅうかん理しは、野生動物のひがいを食い止め、人が野生動物とともにくらせるようにするための、せん門てきな知しきとぎじゅつを身につけた人のことです。鳥じゅうかん理しを目ざそうと思った理由は、わたしは里山を歩いて野生動物の足あとや木についたきずを見つけ、どんな動物がここに来たかをさぐることにわくわくするからです。

そして、宇都宮大学の高橋先生の里山の話や、小金ざわ先生のシカやサルのお話を聞くのが楽しいので、二年前から鳥じゅうかん理しようせいこうざを聞きに通っています。今、その鳥じゅうかん理学のぎじゅつが、福島でひつようになっています。

わたしが保育園に通っていたころ、しんさいの後、電気が使えない日があり、ろうそくをつけて夕ごはんを食べたことをおぼえています。テレビがつかないから、早くふとんに入って、妹と、つめたいつま先をくっつけてねました。

小学生になってから、福島からわたしの家まで電気が来ていたことを知っておどろきました。そしてその原発で事が起きたことで、福島県の人が大きなきせいをはらったことはショックでした。原発事このけつか、福島には今も人が住めない場所があります。そして、人の手がとどかない場所で野生動物たちがふえ、さまざま問題が出てきています。

帰かんこんな区いきなどでふえたサルやイノシシが、人が住んでいる地いきにまで広がり、田んぼや畑の作物にひがいが出たり、人を見てもにげないことから、とつぜん向かってきたら、人が危険になったりする心配があります。

また、空き家が多くなったことが、外来しゅがふえるきっかけになっています。たとえばハクビシンやアライグマは、家の屋根うらをすみかになり用しますが、人が家を使っていないことよってしん入しやすくなり、今まで生息がかくにんされていなかった場所でも見つかるようになりました。とくにアライグマは、農業ひがいを引き起こすだけではなく、人に大きなしょうがいのをのこす病気もうつします。

わたしはこのような問題を、ひがいぼうじよ、生息地かん理、こ体数かん理の二つの考え方から、野生動物の習せいなどをり用してよせつけないようにしたり、すみ分けをしたりする方ほうを勉強しています。わたしは今すぐに福島へ行つて活動することはできないので、今住んでいるところで、アライグマの生息調査をしたり、アライグマの生息をかくにんできるかんたんなトラップを高校生たちと作つたり、アライグマの生息かく大に注意を向けてもらうこうぎをひらいたりする活動をしています。わたしはしよう来、ひなん区いきに住んでいた人たちがもどるときにこの活動を役立てるために、しかくが取れるまでしつかり身につけるつもりです。そして、多くの人によびかけて、いっしょに取り組みたいと思います。

「笑顔は魔法の調味料」

長崎県 黒川 海空 「小学1年生」

「きょうはがつこうで目をとじておいのりしたやろ？」とお母さんがいいました。

「何で知つとるとっ？」

3月11日ごご2時46分。東日本大しんさい。つなみ。このことを学校でならいました。そしてそのときわたしは学校だけではなくて日本中どこでももくとうをしたことをしりました。きつとわすれてはいけなからだとおもいます。つなみのおそろしさやつらいおもいをした人たちの気もちをわすれてはいけません。

3月になるとよくテレビで東日本のことをみました。みたこともなくずれた町がありました。「こんなところで生活できるとかなあ。」 しんぱいになりました。

おかあさんといっしょにデパートに行きました。しよくひんうりばに「東日本をおうえんしよう」というはたがたくさんあります。そこにはたくさんおいしそうなものがならんでいました。なんぶせんべい、牛タンべんとう、ずんだもち、三りくワカメスープ。

「おいしいから食べてみて。」 とげんちのかたがげんきにはたらいっていました。わたしは東日本の人がげんきだったのであんしんしました。ワカメスープをしよくしました。だしがきいていてワカメの色がきれいでじわつとしたあじです。お母さんが「おいしかね。さむい日には体にしみてあたたまるばい。」 とにつこりしました。わたしもにつこり。うっていた人もにつこり。

お母さんはスープを3ふくろかいました。おいしかったからおじいちゃんやおばあちゃんにもあげるそうです。きつとみんなこれを食べたらえがおになるとおもいます。東日本をおうえんするというのはみんながえがおになることだとおもいました。

そこでわたしはしらべてみました。東日本にはもつとおいしいものがあります。くだものやぎよかいりい、お米などたくさんとれます。わたしはくだものが好きなのでデザートをたくさんつくってほしいです。ふくしまのももやさくらんぼ、いわ手のりんご、みやぎのなしをつかって三りくゼリー『光のたまてばこ』をつくり

たいです。

ゼリーにしたらくだものをおいところにすむ人でも、いつでもおいしくたべることができません。

えがおで食べるとおいしいです。おいしいとえがおになります。えがおがいっぱいの日本になってほしいです。食はいろんな人の心を元気にしてくれます。わたしはまだ小学一年生だから知らないことやできないことがおおいけれど、たくさんまなんで、たくさんたべておうえんします。

「私が東北の人たちにできること」

東京都 辻 真優「小学2年生」

青森・秋田・岩手・宮城・福島・山形でおきた東日本大震災から5年がたつて、もとの元気な町にもどってもらうために、今、自分ができていることは何か考えてみました。

わたしにできることは、しんさいで体をこわしたり、心にきずをおった人たちに優しくして、生きるひかりをあたえることです。

なぜかという、わたしのしょうらいのゆめは、かんごしになることだからです。もし私が、かんごしだったらこういうことをしてあげたいと思っています。

東日本大しんさいにあつて、けがをしてしまったり、お母さん、お父さんが亡くなつて、子どもだけになってしまった人、それに、体がふじゆうな人をなんとかしてたすけたいと心から思います。

子どもだけになった人には、自分の子どものように育てるか、ほかの人にあずけて育ててもらうようにサポートしたり、しせつを作つて、わたしがせわをしてあげたりしたい。

体がふじゆうな人は、いつしよについていつてあけて、目がみえない人だったら、これがこれ、あれがこれといったように手でおしえてあげたりしたい。耳がふじゆうな人だったら少しでも音がきこえるようになるために、大きい音がある、かねのそばにつれていつて、少しでも耳がきこえるようにしてあげたい。体がうごかないときは、少しずつ体をうごかしたりする。足がわるい人には、わたしのかたにつかまってもらい、少しずつゆつくり歩いて、足がうごくようにしてあげたい。

このようなことをして、ひさいちの人たちに生きるきぼうをあたえたい。

5年がたつて、町は、すこしずつつこうしているかもしれないけれど、人の心はかんたんにはもどらないので、全員でささえあつていくことが、とても大じだと思ふ。

わたしもはやく大人になつて、かんごしになつて、人のために力になれるよう、仕事とをがんばりたいです。

「大好きな東北」

埼玉県 佐藤 初花「小学3年生」

わたしは、三才から六才までせんだいに住んでいました。しんさいの時は、さい玉県のおばあちゃんの家に行きました。さい玉県もじしんで大きくゆれてびっくりしてこわかったです。

テレビのニュースで東北のえいごうを見て「どうしよう。たいへん。」と思いました。

わたしは、四月からようち園に入園するのでせんだいにもどりました。せんだいでくらしした四年間はとても楽しかったです。せんだいのよい所は、山、海、川、くう気がきれいでした。友だちは、みんなやさしかったです。東北のいろいろな所にたくさん旅行に行きました。

青森県では、あさ虫水族館でアシカショーとイルカショーを見ました。東北で、

「イルカショーを見れるのは、青森県だけだよ。」とおとうさんが教えてくれました。アシカもイルカもどちらともかわいかったです。

岩手県では、わんこそばを何ばいも食べました。びっくりしたのが食べ

終わるとすぐにおねえさんが「ハイハイ。」

と言いながらわたしのおわんに入れてくれました。とても楽しいおそばがとてもおいしかったです。

秋田県では、かまくら祭りに行きました。ソリで遊んだり初めてなまはげに会つたりしました。

山形県では、いもに会に行つて大きななべで作つているのを見てすこくびっくりしました。なべをシヨルカーでかきまぜていました。

ふく島県では、三春のさくらを見ました。木は太くさくらの花びらが何まいもありました。さくらは、とてもきれいでした。

みやぎ県では、川に何度も行きました。カニを見つたり魚を見つたりしました。川の水は、とてもつめたくてきもちよかったです。

わたしが知らない東北のよい所は、まだまだたくさんあります。わたしの知つている東北のよい所をかん東の友だちにつたえたいです。また、休みになったらかん東の友だちに会いに行きたいです。これがわたしにできるふつこうです。

「私が今、復興のためにできる事」

愛知県 松本 由梨「小学3年生」

初めて「津波」という言葉を知つたのは、私が三才の時でした。

東日本大震災が起きた日、名古屋もゆれて、私は、とても怖がつていたそうです。ママは、仙台のおじいちゃんとおばあちゃんと連絡が取れずに、ずつと心配していたそうです。

私は、ママやパパがずつとニュースを見ているのを見て、疑問に思つていました。

そこでパパに、

「何で、ニュースばかり見ているの？」

と、聞いてみました。すると、パパは、

「日本の上の方に津波が来たんだよ。」

と教えてくれました。そうしたら、ちようど津波で家や車が流されて行く映像が出て来て、

(これが津波なんだな)

と思ひ、とても怖くなりました。それと同時に、おじいちゃんとおばあちゃんの手が心配でたまらなくなつてきました。

ママが何度も、何度も電話をかけて、やつとつながつたのは、夜の十時でした。

おばあちゃんは、外でお茶を飲んでる時に地震に遭つたそうです。おばあちゃんの話では、ゆれた瞬間、目の前のコーヒーカップが飛んで行つたそうです。そして、家に帰つたら、食器棚やタンスの自身は、全部飛び出し、三百キロ以上もあるランドピアノも、大きく横にずれていたそうです。

おじいちゃんは、仕事で東京にいて、次の日に、いとこの卒園式に出席する予定でしたが、延期になつてしまったそうです。でも、二人が無事で安心しました。

その後、地震や津波で亡くなつたり、家族や親族を亡くしたりした人がたくさんいる事を知つて、今でも心が痛いです。

今年の三月十一日、学校で先生からお話がありました。

「東北の復興を願うなら、東北の食べ物を買つたり、旅行で東北に行くの良いですよ。そうすると、東北にお金が行つて、復興につながりますよ。なので、東北の方たちを助ける事になりますよ。」

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 小 | 学 | 生 | の | 部 | 入 | 選 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|

その後、みんなで黙祷を捧げて下校をしました。

家に帰ると、ママが追悼式をテレビで見せていました。学校での話をしたら、「家のお米は福島のお米だよ。」

と、教えてくれました。ママも放射能が気になっていたのですが、福島でとれた物が全て汚染されているわけでは無いと地図を見て思ったそうです。

東北の方たちは、今でも色々な事で困っています。私は、一刻でも早く復興できる事を願っています。そして、これからも小さい事かもしれないですが、福島のお米を食べ続けて行きたいです。

「私を感じたふつこう」

福島県 村上 紗和子「小学3年生」

「ふつこう」の意味を知りたくて、じしよで調べてみました。そこには、「おとろえたものが、もとのようにさかになること。また、さかんにすること。」と書いてありました。

でも、その意味はよく分かりませんでした。じしよの例えのらんに、「大地しんにあつた町がすつかりふつこうした。」とも書いてありました。

大地しんのあつた五年前、私は、四才でした。ようち園から帰ってきて、お昼ねしようとした時、家がガタンと大きくゆれました。祖母が私にふとんをかぶせた後、何かが頭の上に落ちてきました。その後はよくおぼえていません。おぼえているのは、祖父にだっこされて家からはなれた場所から、何度も大きくゆれる家を見ていたことです。雪がふつてきて、とても寒かったしこわかったです。父と母は仕事でなかなか帰つてきませんでした。心ぼそくてさみしかったです。父と母がつとめている会社の建物が全部こわれてしまった事は、後から知りました。

その頃の事を父と母に聞くと、私と祖父と祖母だけを遠くにひなさせようと思った事もあつたようです。色々と考えたけつか、大好きで思い出のある場所に家族みんなで住み続ける事を決めたそうです。それからは、安心して子どもたちが遊べる室内の公園づくりにきょうじしたり、「ふつこう」のための勉強会にさんかしたり、自分たちにできることから少しずつ取り組んできたそうです。その話を聞きながら、私は泣きそうになりました。室内の公園で父と母とトランポリンをして楽しかった事や、父がたぐさんの人の前で何かを発表していた事を思い出しました。全部、私や子どもたちのためにがんばつてくれた事でした。

地しんから五年がたつて巨人にふみつぶされたような道路が直されたり、新しい建物が建つたりしています。でも、物が直されたり建物だけが新しくなつたりする事が「ふつこう」ではなくて、みんなが「楽しい」と思いながら生活できるようになるのが本当の「ふつこう」だと思います。そのためにはそこに住むそれぞれの人が、自分たちの事だけではなくて、おたがいの事を思いやり、大切にすることが大事だと思います。

今、父と母は、お友達といつしよに、みんなが、えがおで楽しめるお祭りを毎月開いています。「大へんだ。」と言いながらも、とても楽しそうです。楽しみにして集まってきたりくれる人たちもふえてきました。この場所も、五年前にたくさんの物がこわれていた場所です。

父や母やお友達を見て、じしよには書いていない「ふつこう」の意味が何となく分かった気がします。私はまだ小さくて色々なお手伝いができないけれど、私ができる事は「どんなことだろう。」と考えています。

「子供、ガイドでもり上げ隊」

福島県 遠藤 萌花「小学5年生」

学校の総合の授業で、「キッズ福島観光課」という福島をもり上げるためには、どうすればいいのかを学習しました。実際に、福島をアピールしようとしている人たちの所へ行ってどんな工夫がされているのかを見てきました。福島に来たくなるようなホスターのよびかけや、こでしか見れないような特典を考えたりしていて、福島にまたたくさんの人がもどつてくるだろうなあと思いました。

しん災から5年たつて、地しんの事をなんとなく忘れていつている中で作文のテーマにあつた「私たちにできる復興」という言葉を見た時、総合の授業で勉強した事が役に立つのでは？と思いました。福島だけではなく、東北全体にたくさんの人が来てくれるような「スマイルフェスティバル」を開くことです。たいいていのイベントは、大人だけで考えて開きたいけれど、そのイベントをきかくするのには子供もまぜてもらいます。なぜなら、子供が好きな事は子供が考えた方が面白い案がうかぶからです。

「スマイルフェスティバル」では、一般的なイベントで行なわれる物作り体験や名産品の販売、スマイルもゆるせん会を行なうほかに街めぐりツアーがあります。この街めぐりツアーは、地元の人がガイドさんになって来てくれたお客さんを案内します。十分ほどのコースもあれば、「1」「2」時間コースもあるのどどちらかを選べます。ガイドさんの中には子供もいます。子供は大人が知らない秘密の道や場所を知っていたりするので、子供のガイドさんを集まかけたらくさんとたくさん集まると思っています。ガイドさんになつた人はその町の事をしつかり調べて勉強しなくてはいけません。毎年試験を受けガイドさんにふさわしいかチェックしてもらいます。こんなふうには、子供ガイドのシステムがあれば、うわさが広まり、「面白そうだから行ってみようかなあ。」と思つてくれる人がふえると思います。

「東日本大震災の教訓を忘れない」

愛知県 近藤 康弘「小学5年生」

二〇一一年の三月十一日午後二時四十六分に、東北でマグニチュード九・〇の大震災が発生しました。この当時僕は六才でインターナショナルスクールに通っていました。僕は、大きな地震が東北地方で起こったことさえ知らず、次の日、突然に学校が休校になり気がつきました。アメリカやイギリス、オーストラリアの友達も次々と日本から出国し、先生達へ大使館からの日本退去命令が出され避難していき、僕は、とり残されたさびしい気持ちになったことを今まで覚えています。しかし、僕は、この日を境に自分が日本人なんだという、当たり前だけど、日本を守りたい。逃げたくない、という気持ちでいっぱいになりました。

月日が経ち、僕にも色々なことが理解できるようになりました。自然災害による地震の怖さと津波の恐怖、原子力発電所の事故による放射能汚染等、失われた代償が大きすぎる現状を、目にし耳にする日々が続いているからです。まだ、見つからない人を早く見つけてあげてほしいです。

僕の家では、ほぼ毎日、少しでも復興の役に立ちたい、という思いで、東北地方のおいしい魚や果物が食卓に並んでいます。しかし、僕が一番心が苦しくなるのは、同じ日本人なのに、被災した人から、放射能がうつると、うそを言ったり、過剰な風評を平気で言う人が、一人でもいることです。日本人として恥ずかしくなります。今だからこそ、真実を目で見て確かめることが必要と感じるし、やるべきことを考え行動することが大切だと思います。そして、被災した人々に優しい心で寄りそい話を聞いて、心の復興に力を貸すことが僕たちの役目だと思います。

そして、反省すべき点は反省し、次の世代へ教訓として記憶を未来に伝えていく義務が残された僕たちの使命であると、心から信じています。僕は、生きているだけで幸せなんだということを知り、普通なことが一番大事だということがわかりました。将来、人のために役に立つ仕事にしたいです。そして、傷ついた人の心を少しでも治してあげたいと心に誓います。

「あの災害をうけて…」

愛知県 野田 比奈子「小学5年生」

私が保育園で楽しくそうじしている間に、東北であんなにおそろしいことが起こっているとは思いませんでした…。

二〇一一年、三月十一日、二時四十六分、東北地方太平洋沖で、マグニチュード九・〇の地震が起きた。名古屋では、わずかなゆれで、気が付かない人が多かった。私は、テレビで、地震だけではなく、津波にもおそれたことを知り、その映像を見た。私は、「何か出来る事はないか?」と思った。

買い物に行くと、募金箱があり、私は、百円を入れた。それをくり返し、たくさん募金した。

東日本大震災から一年がたつても、復興は、なかなか終わらない。その時、私は、初めて知った事がある。おじいちゃんの事だ。おじいちゃんは、少しでも、復興の役に立てばという思いで、岐阜県中津川市から、東北まで、一人で、車で行ってきた。その写真も見せてくれた。おじいちゃんは、私の知らない所で、すごい事をしていた。おじいちゃんに、聞いてみた。「どうして、こんなに役に立とうとしているの?」と。おじいちゃんは、笑って答えた。「役に立てば、東北の人にしあわせがやってくる。おじい

ちゃんは、それを願っているからだよ」と。私は、とてもおどろいた。東北とは、何も縁のないはずなのに、こんなにがんばることが出来るなんて。

あらためて、私は、東日本大震災の復興のために出来る事を考えた。

一つ目は、募金が大切だと思う。五年がたつた今でも、仮設住たくに住む人や、町から、出て行く人もいると聞いたので、少しでも早くみんなの生活が豊かになつてほしい。そのためには、十分なお金が必要だからだ。二つ目は、ボランティアなどに参加して、みんなを助け合うこと。三つ目は、あきらめている人を勇気づけるために、手紙を出すことだと思う。

そして、私は、自分のふるさとについて考えてみた。ふるすとは、一番大好きで、一番おちつく場所。もし、自分のふるさとが災害にあつたら、とても悲しくなつて、復興がなかなか終わらないと、あきらめて出ていくかもしれない。それに、復興が終わつて、ふるさとのすがたが、ぜんぜんちがうのも悲しくなる。一番、ふるすとは、大切な所だと思う。

私は、東日本大震災で、ふるすとは、大切だということ。みんなの協力して、みんなとふるさとを守ることなど、たくさんのことを教えてもらった。そして、ふるさとの見方も変つた。私は、一日も早く、東北の人たちにつつてのふるさとが、活気をとり戻せるように協力していきたい。

「私たちにできる復興」

新潟県 加勢 唄「小学6年生」

私たちは、岩手県陸前高田市などの被災地を訪問して、復興応援活動を続けてきました。復興のために私たちが取り組んだことは、募金活動と被災地訪問活動です。

募金活動は、陸前高田市に笑顔と花火を届けるために行いました。募金活動は、アオーレ長岡や三島まつり、コンビニなどの三島地域のお店十ヶ所ほどで行いました。三島地域のお店には、三島の竹で作った、竹とうろうの募金箱と陸前高田応援メッセージを書いてもらう用紙を置かせてもらいました。置き募金では、一袋に収まらず三袋分も集まる場所もありました。募金活動の結果総額は、五十四万五千二十二円になりました。

この集まったお金で花火を打ち上げていただくため、私たちは、長岡で代表的な花火師嘉瀬さんに打ち上げをお願いしました。しかし、五十万円で打ち上げられる花火は、数発しかないことは分かっていたので打ち上げていただくか不安でした。

ですが、嘉瀬さんは、

「あなたたちの気持ちで十分ですよ。」

と、おっしゃってください、打ち上げをしていただけることになりました。これはとてもうれしいことだなと思いました。

復興のために取り組んだ被災地訪問活動では、六月と十月の二回被災地を訪問しました。六月の訪問では、被災地の現状をよく見てきました。仙台市は、新しい道路や建物がたくさんできていましたが、陸前高田市に近づくほど、茶色の砂が目立つようになりました。盛り土や住宅が多く造られていて、震災前の景色はあまり残っていないように感じました。仮設住宅の方の話では、震災があったことを忘れられるのが、一番つらいということをおっしゃっておられ、私は、震災のことをもっといろんな人に広めていきたいと思いました。そしてどんなことがあつても震災を忘れてはいけないと思いました。

十月の訪問では、私たちが被災地の方に笑顔になってもらいたいと思い、長岡を象徴する「花火」を打ち上げました。花火は、白菊、金冠、ニコちゃん火花、蝶々の四種類です。ニコちゃん火花には、被災地が笑顔に

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 小 | 学 | 生 | の | 部 | 入 | 選 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|

なれるように、白菊と金冠には、復興と慰霊の気持ちを込めて打ち上げました。花火が開くと、周囲には、たくさんの笑顔や感動の涙が見られました。私たちも笑顔を届けられた喜びとうれしさにあふれました。

このような活動で被災地に笑顔を届けるために私たちは、これから被災地の方々や笑顔になれる活動が続いていかなければいけないと思います。そして、被災地に大きな希望と笑顔を届けていってほしいです。

次の学年の人達には、これからも、もつと東日本大震災での被害や被災地の方々の気持ちをたくさんの人に広めて、東日本大震災が起きたことを忘れないでほしいと、たくさんの人たちに広める活動をしてほしいと思います。そして、被災地に大きな希望と笑顔を届けていってほしいです。

これが私たちにできる復興だと思います。

「私たちにできる復興」

新潟県 北澤 奈緒「小学6年生」

私たちは、東日本大震災を体験した岩手県陸前高田市の人たちを勇気づけるために活動してきました。最初は平成二十三年東日本大震災が起きた年に手紙を書いて送りました。そして平成二十四年に訪問活動を始めました。そこから訪問活動を毎年やるようになりました。そして平成二十七年私たち六年生が陸前高田市に訪問しました。私たちは、まず最初に陸前高田市について調べました。そして五月二十五日には陸前高田市に花火を打ち上げるために募金活動を始めました。長岡のいろいろなイベントに行き募金をしました。他にコンビニなどに募金箱を置かせてもらい募金をしました。そして六月三十日に二泊三日の修学旅行で陸前高田市に行きました。その時の陸前高田市訪問では、被害を受けた陸前高田市の現状を見て回りました。この時はもうほとんど瓦礫はありませんでした。そして家が流されて家がない人は仮設住宅に住んでいました。仮設住宅での不満は、せまいことだそうです。今はもう家が盛り土というところに、建ってきています。

そして学校にもどってきたら十月の訪問で何をするかを考えました。そして広田小学校と仮設住宅の人たちを笑顔にするためにならないろフェスティバルをすることにしました。広田小学校の人との交流では、レクリエーションと歌を歌いました。それで絆を深めました。仮設住宅の人との交流では、一緒にキャンドルホルダー作りや歌を歌いました。その後、仮設住宅がある広いところでだけ灯ろうと、交流の時に作ったキャンドルホルダーを仮設住宅の人と一緒に点灯しました。そしてすべて点灯し終わったら、脇野町小学校の人からのメッセージを仮設住宅の人へ伝えました。そのメッセージを伝え終わったら私たちが募金活動でためたお金で花火を打ち上げました。とてもきれいに打ち上がりました。仮設住宅の人はとても笑顔になっていました。それを見て私はとてもうれしくなりました。私たちが、頑張つてためたお金できれいな花火を打ち上げて仮設住宅の人たちを笑顔にすることができてとてもうれしかったです。花火がすべて打ち上がったら「ありがとう」と言われてとてもうれしかったです。こんなふうに感謝されてこの活動をしてきてよかったと思いました。そして学校に帰ってきたらこの活動を続けていくためにどんなことをするかを考えました。そして家でポスターセッションをしたらいいんじゃないかという意見が出ました。なので、ポスターセッションと座談会をすることになりました。ポスターセッションではポスターに陸前高田の現状や陸前高田に行つてやってきたことなどを書きました。募金活動の写真などもはり分かりやすく説明しました。そしてら五年生はこの活動をやること

言っていました。私はこの活動をして自分も成長することができたのでこうした活動をもっといい活動にしていってほしいと思います。

私が考える私たちにできる復興は、被災地に行つて被災地の人たちを笑顔にすることです。人は助けられたらうれしいし、全く関係ない人にも心配されて自分たちのことを考えてくれたら嬉しい。全く関係ないだけでもとてもうれしいので、人を笑顔にすることは復興にもつながると思います。

「手と手をつないで」

神奈川県 佐々木 香里「小学6年生」

東日本大震災の時、私は一年生でした。友達と一緒に遊んでいる時に大きなゆれに気づき、校庭の中心へ避難しました。

震災から五年たった今でも、あのこわさは忘れられません。私はあのような事が起きても大丈夫なように小さな事でも出来たらいいな、と思いました。

ある日、ニュースで大震災の被害にあった土地の事が報道されていました。私は気になって、ずっとテレビを見ていました。すると、その土地に住んでいる人がインタビューを受けている場面がでてきました。

「大震災で起きた津波がまた来ても大丈夫なように、防波堤を造ったんです。でも、見て下さい。この土地の周り全てを防波堤で囲んでしまったため、昔のような自然豊かな土地がきれいさっぱりなくなってしまったんですよ。」

私はこの話を聞いて、とてもおどろきました。つまり、震災のえいきょうを防ぐために行動したとしても、その代わりに自然がなくなってしまうのです。私は、原因はコンクリート造る時にでたガスだと考えました。

土地を守る事、なおかつ自然をこわさないためには、自然の力を利用し、震災の被害にいとめる力をバランス良くゆう合させて造ればいいのかな、と思いました。

東北は関東より緑豊かな土地です。つまり、自然の力は関東より強い。東北にしか出せない力、東北にしかできない事はたくさんあると思います。そんな東北にがんばれ！とエールを送りたいです。

しかし、東北だけががんばっても、活動はあまり進みません。活動を進めるためには、ただがんばれ！と応えんするだけでなく、手をさしのべる事も大切です。「ボランティア活動をする！」といつても、私のやる気ができるのは少しの間だけです。これでは困るなあ、と思った時、バツと私ができることがでてきました。それは、けん金です。お金を寄付する事によって、災害に対応するために使う費用として利用、今も被災して仮設住宅で暮らしている人のための新しい家を建てたりするための費用などに利用する事ができます。

しかし、お金だけを寄付しても、人手がなければ働く事さえできません。かといって、簡単に東北に行く事もできません。そこで、私が考えたのは、このように国民の意見をば集し、考えを集める事で、良い意見が出てくると思うので、自ら「行きたい。」と思う人がでてくる可能性も上がると思います。なので、強制的に働く内容を決めて行かせるよりも、自分の意志で働けば復興も進むのではないかと思いました。

復興に向けて自分たちができること、それは心をこめたけん金と、自分の意見を主張することです。その土地の良さを引きだし、みんなで意見をだし合って、みんなで協力して、手と手をつなぎ合っていくことが、復興への第一歩だと思いました。

そして、私がもう一つ思った事があります。それは、修学旅行についてです。私が聞いた所、私の小学校では、前は東北の方へ行っていたそうです。今は長野、岐阜県に行っていますが、これからは東北に行ってほしいなあと思います。なぜなら、東北に行けば震災で被害を受けた所へボランティアなどに行けるからです。

修学旅行のように、どこかへ行ける機会があったら、震災で被害を受けた所へ行つて、人々を助ける事を学びたいです。

「福島復興、今、僕にできる事」

ドイツ連邦共和国 鈴木 晴稀「小学6年生」

二〇一一年三月十一日十四時四十六分、突然の大きな揺れが僕をおそった。東日本大震災だ。その瞬間、空も急に暗くなり、庭の自転車ガタガタと物が倒れる、ものすごい音が鳴りひびいた。動くはずのない電信柱まで左右に振られ、電線は縄跳びのように揺れ、そのおそろしい揺れが止まるまで、僕は庭のフェンスにしがみついていた。姉が「怖い」と叫び、母が僕と姉を抱きしめて守ってくれた。その揺れは三分位続いたが、僕にはもともと長い時間のように感じた。

揺れがおさまると、真つ先に安全な公園に避難した。その後、ラジオを聞いて、自分達の身に何が起きているかを知った。震度を聞き、町の状況を聞き、みんなが慌てふためいていた。小学一年生だった僕には、公園で高学年のお兄さんや先生、母たちが子どもたちがこれ以上怖いと思わなくてすむように、ボールで遊んで気を紛らわせてくれたり、余震が来た時に手をつないでくれたり、公園の中でもさらに安全な所に集めて守ってくれたりした事が、特に印象に残っている。

夕方になり、もう大丈夫そうだったので自宅に戻り、夜は余震を何度も感じながら、家の中で一番安全な部屋で過ごした。

次の日、テレビがやっと思ったと思ったら、津波による大惨事を知り、とても辛くなった。そんな矢先に、先生が僕の家に来てくれた。先生と会えた時は、先生が無事だった事、笑顔で僕達を元気づけてくれた事に、ほっとした。先生は電話が使えなかったので、生徒の家を一軒一軒回つて、みんなの安否確認をしてくれていたのだ。

その日の夕方、福島第一原発が危険な状態にあるという情報が入り、事態はさらに深刻になった。会社を離れられなかった父は、僕たち三人で安全な所に先に避難をしてくれと言った。母も、姉も、僕も、父だけがいわき市に残っているのが不安だったので、一緒に残ったけれど、地震から四日後、ついに石川町に避難する事になった。

石川町では、公民館を避難所として解放してくれていて、いわき市から来た僕達を受入れてくれた。公民館では人々の優しさにふれ、とても怖い思いから解放されて少しかほっとできた。

石川町には二日間滞在した。その後、父が宇都宮市で仕事をする事になり、僕たちも一緒に移動した。一週間の滞在中、原発や水道、電気の復旧などの様子を見ていたが、何よりやはり原発が心配だった。父がいわき市に戻る時に、僕はもう少し避難していた方がよいと言い、宇都宮市から電車に乗り、横浜の祖父父母の家に避難する事になった。そこで、二週間の避難生活を送った。

僕はこの避難生活の間、早く自分の家に戻りたくて仕方がなかった。早く父と一緒に生活したかった。でも、家の水道も止まったままで、スーパーも商品不足で買い物もできず、なかなか戻れずにいた。

四月になって、学校が予定通り始まるという連絡が入った。ちょうどその頃、家の水道も使えるようになった。母が学校も始まるし、多少生活が不便でも、もう戻りたいと言い、父を説得して、僕たちはやっといわき市に戻ってきた。放射能に注意を払いながらのきんちょうした帰郷だったけれど、大好きな自分の町に戻って来られた時、たまたまなく僕はうれしかった。

